

周辺の  
みどころ

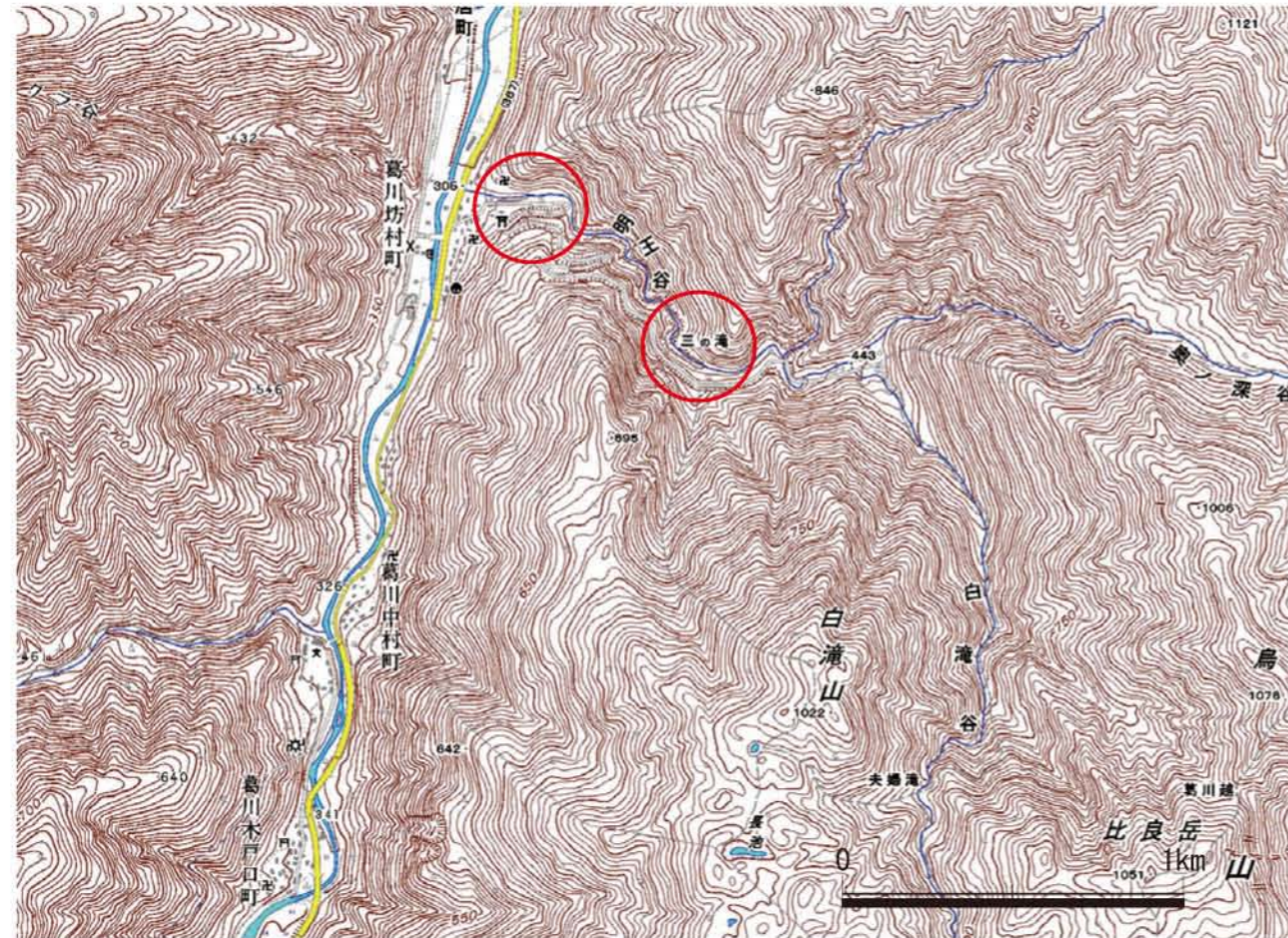
明王院は京都と若狭を結ぶ鯖街道の道すぐらにある。また、比叡山をめぐる霊場の一つでもあるという多様な表情を持つ。葛川地区の総氏神である地主神社は水の関わる非常にユニークな側面を持っている。

当社は国常立命を祭神とし、地主神の思古淵明神を合祀する。思古淵明神は水の神といわれ、安曇川流域では筏乗りの祖神として崇敬される。

境内には三間社春日造りの本殿と一間社唐破風造の幣殿が建つ。いずれも文亀2年(1502)の建立で、重要文化財に指定されている。



地主神社



[アクセス]

- JR湖西線堅田駅から江若バスに乗り、「坊村」下車後、徒歩3分。

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]  
(関連文献/関連施設)

- 大津市歴史博物館『回峰行と聖地葛川』平成16年

# 葛川明王院と三の滝

大津市葛川坊村町



明王院本堂 (重要文化財)

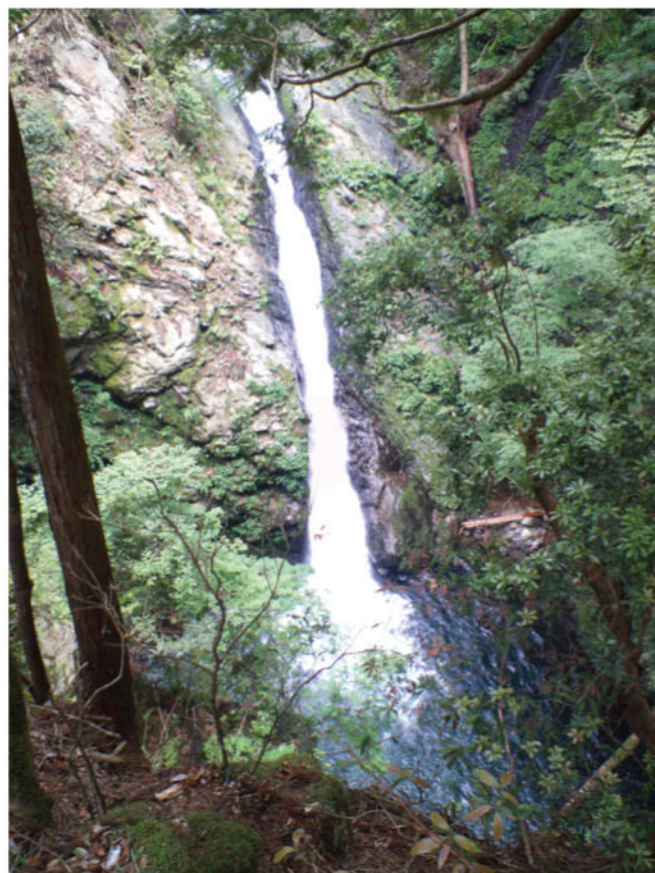
葛川明王院は、比良山系の西側を流れる安曇川上流の溪谷に立地する天台宗の寺院で、息障明王院ともよばれる。

背後に比良山がそびえ、安曇川に注ぐ幾筋もの谷川がつくる深山幽谷の地形から、天台修験の道場・別院として古くから山岳信仰の拠点となった。

その歴史は、平安時代初期の貞観年間(859~877)に、比叡山延暦寺の僧で近江国浅井郡出身の相応和尚(831~918)が葛川の三の滝で祈念していたところ、飛瀑中に生身の不動明王を感得し、自ら刻んだ不動明王を安置したことに始まると伝える。

滝中の不動明王という特殊な信仰を背景とした水の宝である。





三の滝（左） 参籠札（右）

## 葛川明王院と三の滝

所在地 大津市葛川坊村町

### 明王院の由緒

明王院は、比叡山無動寺谷で修行していた相応が、安曇川源流に修行の地を求めて分け入り、当地を天台修験の道場として定めたことに始まる。以来、回峰行をおこなう延暦寺の僧侶が参籠する場として、葛川は山内において特別な地位を占めるようになる。

中世の葛川は「明王御領」と呼ばれ、青蓮院および無動寺の支配下に置かれていたが、鎌倉時代以降、定住化した住人が政所における寄合を中心に惣結合を強化し、行者講中の世話役たる常喜、常満家が成立する。住人の法会への積極的な関わり方を示すものとして、蓮華会中に地主神社で行われる太鼓廻しの行事があげられる。これは、夏安居とよばれる毎年7月の葛川参籠のなかでおこなわれ、勢いよく太鼓を廻し、その上から行者が飛び降りるもので、三の滝で修行していた相応が滝壺から不動明王を抱き取った、という開基の由来にちなむ。

### 葛川参籠と参籠札

葛川への参籠の様子が具体的にわかるのは鎌倉時代末期以降のことである。行者は6月の蓮華会と10月の法華会に7日間参籠し、その間に自ら参籠札に日付、名前、参籠回数を書くことになっていた。参籠札を納めるのは、霊場に籠もり、修行を積んだことを示すものであり、参籠回数の多いほど験力が授かるものと考えられていた。

現在、明王院に残る参籠札は鎌倉時代から江戸時代に至るものが計501枚残され、重要文化財に指定されている。鎌倉時代初期、元久元年（1204）の参籠札は高さ391cmという巨大なもので、この一本だけ特に古い。室町時代には聖俗の隔たりなく多くの人々が参籠札を納めており、足利義満、足利義尚、日野富子などの名が見える。参籠札がこのように多数残っているのは他に例を見ず、中世から近世にかけての霊場信仰の実態を示すものとして価値が高い。



明王院境内（上左）  
明王院庵室（上右）



千手観音立像・不動明王立像・毘沙門天像（重要文化財）

### 明王院の文化財

明王院は、建物を含めた境内地全体が回峰行の行場としての景観をよくとどめており、本堂・護摩堂・庵室・政所表門の主要建物4棟に加え、境内の石垣・石塀・石段などを含む境内地9,500㎡が一括して重要文化財に指定されている。

美術工芸品では、本堂内陣の厨子内に安置される本尊で重要文化財の千手観音立像・不動明王立像・毘沙門天像が著名で、平安時代後期の

制作になる。独特の三尊構成は横川中堂にならう。重要文化財では他に、室町時代の和絵系絵巻物の優品「紙本著色光明真言功德絵詞」や、鎌倉時代の不動明王画像の大作として知られる「絹本著色不動明王二童子像」、無動寺領伊香立庄と領域をめぐる堺相論の過程で作成された「葛川与伊香立庄相論絵図」、明王院と葛川の住人との関係を伝え、わが国の社会経済史研究上に不可欠の資料である「葛川明王院文書」など、数多くの文化財を伝えている。